

[その他]

九州看護福祉大学 東日本大震災復興支援ボランティアの記録

中川 武子

【要 旨】

本学の東日本大震災復興支援ボランティアは、2011年8月に第1回の学生を福島県いわき市に送り出し、2014年3月までの3年間に6回の活動を継続した。本ボランティアには3年間で、学生延べ59人、教員延べ12人、合計延べ71人が参加した。現地では、いわき市のNPO法人ザ・ピープルの協力のもと、被災地の視察、現地学生との交流、各種事業への協力、交流サロンや仮設住宅の集会場や公民館などでの薬草足湯・薬草茶などの提供を行った。活動に参加した学生達からは、「現地に行かなければわからないことがある」「現地でしか感じるができないことがある」という声がかかれた。

現地での活動終了後に毎日行われたミーティングは、学生自身の不安な気持ちを仲間と共有できる大事で必要な時間となった。また、自分自身のもやもやとした気持ちや行き場のない思いを仲間に話すことによって、気持ちを整理すると同時に、仲間の話を聞くことで自分自身が気づかなかった思いや感情を知る機会になった。このボランティアは、大学をはじめ後援会などの全面的な支援により継続することができた。本ボランティアの第1回から第6回までの活動をまとめた。

キーワード：東日本大震災 ボランティア 足湯 薬草茶 タッチングケア

【緒言】

2011年3月11日の東日本大震災発生後、全国から多くの各種団体、学生等が被災地のボランティアに足を運んだ。本大学においても、震災後5カ月目の8月に第1回の学生を福島県いわき市に送り出し、2014年3月までの3年間に6回の活動を行った。

このボランティアは大学の全面的な支援と、いわき市のボランティア団体「NPO法人ザ・ピープル」の協力のもと、3年間継続された。ボランティアが終了すると参加した学生は、学園祭、学年始めのオリエンテーション、学外の講演などで報告会を行った。しかし、各回の報告会は行われてきたものの第1回から第6回の活動をまとめたものはなかった。

広辞苑によると記録とは「のちのちに伝える必要から、事実を書き記した文書」となっている。東日本大震災の復興支援に大学が取り組んだ学生ボランティアの活動記録をまとめることは、今後、同様のボランティアを計画する場合の資料になると考える。筆者は、このボランティアに毎回かわり、第1回から第6回の活動をまとめ、活動報告として記録に残す必要があると考えた。

本報告の目的は、本学における3年間にわたる東

日本大震災支援ボランティアがどのように組織され、参加した学生が被災地でどのように行動し、被災地の方々とのように接したかを記録することである。

I. 本学の概要

本学は、熊本県北の玉名市（2014年3月現在、人口約70,000人）に、位置する1学部（看護福祉）5学科（看護、社会福祉、リハビリテーション、鍼灸スポーツ、口腔保健）、1学年360人、収容定員1,440人の大学である。

II. 東日本大震災復興支援ボランティア活動開始までの発足経緯

東日本大震災発生後、学生達から「震災の被災地に行き、自分達が被災者にボランティアとして何かできることはないだろうか」という声がかけてきた。しかし、被災地のどこでどのような活動ができるか不明瞭であること、東北までの距離が遠く移動に時間と費用がかかることなどから、学生達は被災地に行けない状況にあった。そこで学長は、被災の現場は、「保健・医療・福祉」の領域の専門職を目指す学生にとって、学科の枠を超えて活動できる学びの

場になると考え、学生達が被災地でボランティアが行えるよう大学内にプロジェクトチームを組織した。このメンバーは学長、副学長、各学科長、教務委員長、学生委員長、保健管理センター長などであった。さらに災害ボランティア経験者と引率可能な教員からなるワーキンググループも組織された。

まず大学は、学生が被災地で活動ができるよう、震災直後から被災地支援に乗り出した玉名市のボランティア団体（れんげ国際ボランティア）を介して、福島県いわき市にある「NPO法人ザ・ピープル」を中心とする「いわき市小名浜地区災害ボランティアセンター」と綿密な打合せを重ねた。

次にボランティア学生を送り出す前に、引率可能な教員1名が、れんげ国際ボランティアの担当者と共に、2011年8月5～7日（3日間）の日程で事前視察を行った。教員は現地のボランティアセンターを訪問し、被災地の状況を把握、宿泊先の確認、学生が参加するボランティア予定の活動先の巡回などを行った。

さらに、現地を訪れた教員が現地視察の結果、学生達の活動拠点の確保と学生達が提供できるボランティア内容が明らかになったことから、2011年8月23日に、学生9人と教員2名を第1回東日本大震災復興支援ボランティアとして送り出した。

Ⅲ. 活動拠点の概要

1. 福島県いわき市¹⁾

福島県いわき市は、福島県の東南端、茨城県と境を接する面積（1231.35平方キロメートル）を持つまちで、東は太平洋に面し、寒暖の差が比較的少なく温暖な気候に恵まれた地域である。2014年3月1日現在、人口は327,269人、世帯128,699世帯である。

2011年3月11日の東日本大震災による被害は、死亡者数455人、行方不明者0人、全壊7,917棟、大規模半壊7,280棟、半壊25,257棟、一部損壊50,087棟（2014年3月31日現在）となっている。

なお、現在いわき市には、福島第一原子力発電所の事故により半径30Kmに位置する双葉郡大熊町、富岡町、広野町、楢葉町などからの避難者が仮設住宅などで暮らしており、その数は22,567人（2014年2月1日現在）となっている（この人数はいわき市の人口には含まれていない）。



図1 福島県いわき市の位置



図2 福島県いわき市の構成地図

2. NPO法人 ザ・ピープル²⁾

「NPO法人ザ・ピープル」は、1990年12月設立、2004年4月に法人格取得した福島県いわき市小名浜に所在する団体である。主な事業内容は、古着リサイクル関連事業、在宅障害者自立支援事業、ボランティア活動体験・研修受入れ事業、被災者支援に関する事業などがある。

ザ・ピープルは東日本大震災発生直後から被災者支援の活動を開始し、いわき市小名浜地区を中心とした避難所への救援物資の提供を行った。震災後、社団法人いわき市社会福祉協議会「いわき市災害救援ボランティアセンター」と連携し、「いわき市小名浜地区災害ボランティアセンター」（以下ボランティアセンターと略す）を立ち上げ、避難者の自立・生活再建に向けた支援活動を継続している。

ザ・ピープルは、このような支援活動の業績が認められ、いわき市平成25年市政功労者、ボランティア

功労で表彰された。

3. いわき市役所林業研修センター「湯ノ岳山荘」

いわき市常磐藤原町湯ノ岳にある「湯ノ岳山荘」が現地の宿泊拠点となった。いわき市役所農林水産部林務課が管理するこの施設は、林業研修以外でも誰でも気軽に使用でき、自炊を基本とし、1泊1,500円程度で利用できた。研修施設であるため、他機関の宿泊者と一緒になることもあり、共同炊事場は順番を決めて使用することもあった。現在「NPO 法人いわきの森に親しむ会」が委託管理している。

IV. 活動の実際

1. 出発前から帰宅後までの流れ

ボランティアに参加する学生の出発前から帰宅後までの流れを表1に示した。ボランティア募集人数は、1回につき学生10人と教員2人である。募集方法は、学生は毎回公募、引率教員は第1回～4回までは学長指名で、教員2人の内1人が経験者、1人が新しく指名された。第5回～6回は教員も公募になった。教員の役割は活動期間中、学生が被災地で健康で安全で安心して活動できるよう支援することであった。

まず、引率教員決定後、ワーキンググループが会議を開催し、ボランティアセンターと活動時期、日程、内容等について連絡調整を行うと同時に、ボランティア参加希望学生の募集期間、面接日程、参加者決定後オリエンテーション内容等について話し合った。

募集により参加希望の学生は「東日本大震災復興支援ボランティア申込書」と「心身の健康状態に関する問診票」を学生課に提出した。申込書には、申込者氏名、所属、生年月日、住所、連絡先、自動車免許の有無および保護者の承諾印などの記入が必要とされ、問診票には普段の健康状態とアレルギーの有無などの記載が求められた。申込者多数の場合は、学生が所属する学科の長とワーキンググループの担当者が面接し参加者を決定した。面接では、福島第1原子力発電所の事故の影響で放射線量が高い地区があること、健康面への影響などについて、本人の理解と保護者の同意の有無について確認した。参加者決定通知は、応募者全員に学生課が結果を電話で連絡した。参加する学生には、活動中の怪我や事故

に対応するためにボランティア保険に加入することが義務づけられた。

ワーキンググループは、参加学生決定後、引率教員と共に、事前準備のオリエンテーションを数回に分けて開催した。最初のオリエンテーションでは、参加者の自己紹介、ボランティアの日程、活動内容、出発までの学習会の内容などを説明した。学習会は学生が中心となり、足湯や対象者の肩・腕・頭部などを血行の流れに沿うように手で軽くさするタッチングケアの学習会と演習、血圧測定の演習、傾聴の学習会と演習などを行った。その他に足湯で使用する薬草を玉名市薬草会と一緒に採取に出かけ、採取した薬草を乾燥させる作業など活動内容に応じて事前オリエンテーションが行われた。オリエンテーションを通して、参加者はボランティアに必要な物品の準備や各自の持ち物などを各自で確認していった。

ボランティアの行程は、第1・2回は6泊7日だったが、第3回以降は5泊6日で組み立てられ、初日と最終日は熊本～いわき市間の移動日にあてられた。宿泊先の湯ノ岳山荘では、学生全員で自炊し、夕食摂取後は毎日ミーティングで学生と教員で日々の振り返りを行い、1日の活動の振り返りを大学が準備した記録用紙に各自で記録した。

表1 活動の出発前から帰宅後までの流れ

時期	実施内容	方法
出発前	引率教員確保	第1～4回は学長指名 第5～6回は公募
	ワーキンググループ会議	ボランティアセンターとの連絡調整
	参加者公募	学生掲示板にて掲示 参加申込書を学生課提出
	参加者面接	応募人数多数の場合 学科長と担当者が面接
	参加者決定通知	参加者10人に学生課より 電話にて連絡
	事前準備	オリエンテーション 学習会(2～3回)
現地	プロジェクト会議	プロジェクトチームに実施計画報告、学生紹介
	活動実施	5泊6日 (第1・2回は6泊7日)
帰着後	反省会	学生、引率教員、学生課 学園祭、後援会総会等 公的な場にて発表
	報告会	報告書作成
	報告書作成	第4回以降作成

帰着後は、学生、引率教員、学生課の担当で反省会を行い、活動の振り返りと次の活動に向けての対策を話し合った。また、公的な場での活動報告会の計画を立てた。第4回からは活動内容をまとめた報告書を作成し、関係者に配布した。

2. 第1回～第6回の活動の概要

第1回～第6回の活動期間、参加人数を表2に示した。各回の活動の実際についてまとめた。

表2 活動回数・活動期間・参加人数一覧表

回数	活動期間	学生	教員
第1回	2011年8月23日～8月29日	9	2
第2回	2012年3月10日～3月16日	10	2
第3回	2012年8月5日～8月10日	10	2
第4回	2013年3月9日～3月14日	10	2
第5回	2013年8月5日～8月10日	10	2
第6回	2014年3月8日～3月13日	10	2
合 計		59	12

1) 第1回活動 (2011年8月23日～8月29日)

(1) 参加者の内訳

第1回は9人の応募者があり面接の結果、全員が参加者となり、引率教員は男女各1名が学長により指名された。その内訳を表3に示した。

2) 活動スケジュールおよび活動内容

表3 第1回参加者の内訳

	学 科	学 年	人
学 生	看護学科	1年	2
		3年	1
		4年	1
	社会福祉学科	1年	2
		2年	1
		3年※	1
教 員	口腔保健学科	1年	1
	社会福祉学科※		1
	口腔保健学科		1

※は男性参加者

第1回の日程を表4に示した。第1回の活動の特徴は、①活動拠点となるボランティアセンター長の講話、②震災の現状を知るために被災地の現地視察、③被災者の現況調査や生活支援のための商品運搬に同行、④現地学生との交流、⑤仮設住宅、雇用促進住宅等で菓草茶、菓草足湯、口腔関連マッサージ指導等の実施であった。

表4 日程別活動内容 (2011年)

日程	日付	内 容
1	8月23日	熊本空港集合 (9:00) 移動 (熊本→いわき市) 泊) 湯ノ岳山荘
2	8月24日	オリエンテーション及びレクチャー 被災地の現地視察 泊)
3	8月25日	被災者宅への宅配販売活動 被災者住宅訪問傾聴活動 泊)
4	8月26日	小名浜交流サロンの活動の講話 被災者住宅訪問による傾聴活動 泊)
5	8月27日	他大学学生ボランティアとの交流 見守りサロン活動 泊)
6	8月28日	仮設住宅で菓草足湯、菓草カフェ提供 チャリティ会場で菓草茶提供 泊)
7	8月29日	移動 (いわき市→熊本) 熊本空港にて解散

1日目、熊本空港に集合し飛行機で羽田空港に移動 (1時間50分)、東京駅からいわき駅へ高速バス (3時間30分) で移動した。いわき市到着後、滞在中の移動に使用するレンタカー2台確保し、宿泊先に到着後、自炊・共同生活を開始した。

2日目、ボランティアセンター所長から「震災の状況とNPO及び復興支援ボランティアセンターの対応」の講話を聞き、震災の現状を知るために所長の案内で被災地の現地視察に行った。

3日目、いわき市買物支援事業の委託を受けている平スカイストアを訪問、担当者から事業概要 (食料品や日常生活用品の入手が困難な被災者に対する支援、スカイストアが移送販売車で被災者の必要としている商品を販売) を聞いた。学生達は移動販売車に販売品の積込みや販売商品の選定を担当者と一緒に行い、販売車に同行し被災者のところを訪ね商品の運搬の補助を行った。また、いわき市からボランティアセンターに委託された被災者の生活健康現況調査を行うために、被災者の現況調査説明を受け、ボランティアセンター調査担当者に同行し、小名浜地区の被災者宅を訪問した。



図3 被災者宅宅配販売活動風景

4日目、いわき市社会福祉協議会の担当者から小名浜交流サロンの活動についての講話を聞いた。また、前日に引き続き被災者の生活健康現況調査を行うために、調査担当者に同行し被災者宅を訪問した。

5日目、いわき市で高校・大学生を中心とするボランティアUGM (Unbidden Group Mates) との交流会、いわき明星大学の学生と懇談会に参加し交流を深めた。小名浜地区雇用促進住宅で見守りサロン事業運営に参加した。

6日目、双葉郡広野町から避難した方々の仮設住宅集会場にて、薬草足湯、薬草茶、口腔関連マッサージ指導等を実施した。また、チャリティバザー会場で薬草茶配布、イベント司会を行った。



図4 薬草足湯の提供の様子

7日目、いわき市から東京駅まで高速バスで移動し、羽田空港から熊本空港まで飛行機で移動し、熊本空港到着後解散した。

(3) 活動報告会

① 優愛祭 (九州看護福祉大学祭)

日時：2011年10月22日 10:30

場所：九州看護福祉大学本館旧学生食堂

② 阿蘇やまびこふれあいフェスタ

日時：2011年11月5日 10:00～

場所：阿蘇市立阿蘇体育館

(小国町社会福祉協議会からの依頼)

(4) 活動を振り返って³⁾

学生達は被災者にボランティアをするというより被災地の現状や被災者の生の声から、常に「被災地から学ばせて頂く」という謙虚な姿勢と態度で活動に臨んでいた。被災地視察では、被災地の惨状を目の当たりにし感情失禁を起こした学生もいた。

計画されたスケジュールの中で、日を重ねるごとに学生間の緊張感もとれ、常に笑顔で過ごし住民に明るい声をかけていた。学生達は「専門的なケアはできないが、被災地の中で被災者同士ではなかなか話せない発災当時の様子や今の気持ちを、側で傾聴することはできる。このことが被災地外からきた学生にできることではないかと考え、被災者の気持ちを受け止めることに徹していた。活動終了後には「もう一度足を運びたい」「身近な人にこの現状を伝えることが私たちにできること」などの声もきかれた。

第1回は出発前の準備期間が2～3週間と短く、放射線測定器を持参することについて配慮なされなかった。ボランティア参加者の健康状態を守るために放射線測定器の持参については、今後の検討課題となった。

2) 第2回活動 (2012年3月10日～3月16日)

(1) 参加者の内訳

第2回は16名の応募者があり面接の結果、第1回目の参加者5名と新規5名が選ばれた(表5)。

表5 第2回参加者の内訳

	学 科	学 年	人
学 生	看護学科	1年	1
		4年	2
	社会福祉学科	1年	3
		2年	2
		3年	1
教 員	口腔保健学科	1年	1
	社会福祉学科※		1
	看護学科		1

※は男性参加者

(2) 活動スケジュールおよび活動内容

第2回の活動の特徴は、①ボランティアセンター長の講話、②震災の現状を知るために被災地の現地視察に加え、③出発前に放射線測定器の持参の有無について会議を行い移動中も含め線量測定、④東日本大震災追悼事業参加、⑤仮設住宅、生活用水が枯渇した集落、高齢者サロンでの薬草足湯、薬草茶などの提供であった。

表6 日程別活動内容(2012年)

日程	日付	内 容
1	3月10日	熊本空港に集合 移動(熊本→いわき市) 泊) 旅館
2	3月11日	東日本大震災追悼事業の会場設営 泊) 旅館
3	3月12日	オリエンテーション及びレクチャー 被災地の現地視察 泊) 湯ノ岳山荘
4	3月13日	広野町仮設住宅で薬草足湯、薬草茶提供 泊)
5	3月14日	遠野町集會場で薬草足湯の提供 泊)
6	3月15日	平スカイストア見学 小名浜地区公民館にて薬草足湯提供 泊)
7	3月16日	移動(いわき市→熊本) 熊本空港にて解散

出発前のオリエンテーション後、放射線測定器の持参について参加者間で会議を行った。会議で学生達から「放射能は目に見えないが、線量を測定し数値化することで、数値によって安心できたり不安を感じたりするのではないか」、「学生自身が測定することで客観的に第三者に伝えることができる」などの意見がでた。その結果、活動地の放射線量を学生自身が確認した上で活動できるよう放射線測定器を持参することになった。

1日目、第1回と同じ行程で移動した。宿泊拠点の湯ノ岳山荘は、発災後1年の節目にあたっており被災地を訪れる人が多く予約できなかつたため、いわき市の旅館に宿泊し自炊はしなかった。

2日目、小名浜地区東日本大震災追悼事業の会場設営を事業担当者と共にいき、追悼事業に参加し震災発生時の14時46分に参加者と一緒に黙祷し犠牲者の冥福を祈った。夜は豊間地区追悼事業キャンドルナイト会場設営を事業担当者と共にいきその事業に参加した。



図5 東日本大震災追悼事業の会場設営風景

3日目、ボランティアセンター長から「震災の状況、ボランティアセンターの対応、いわき市の現状」について講話を聞き、センター長の案内により被災地の現状を知るために現地視察を行った。宿泊場所を民宿から湯ノ岳山荘に移し、自炊生活が始まった。



図6 現地視察風景(豊間中学周辺)

4日目、双葉郡広野町から避難した方々が生活するいわき市にある広野町仮設住宅集會場を訪問し、仮設住宅の方々に薬草足湯、薬草茶などを提供した。

5日目、いわき市遠野町為朝集落を訪れ薬草足湯を提供した。ここは、2011年4月11日と12日にいわき市を襲った地震の影響で、集落の住民が生活用水として使用していた井戸が枯渇した集落だった。住民が生活用水に困っているのに、問題の原因が地下にある場合の行政支援策がないという理由から、行政支援が提供されない地域だった。来訪当時も地区住民がいわき市から生活用水を軽トラックにタンクを乗せ、毎日、集落まで運んでいた。

足湯の提供後、会場住民の方が用意した食事を一緒に食べ、被災当時の状況や現在の生活について住民の話聞き、相互に語らいの時間を設けた。



図7 薬草足湯提供の様子

6日目、いわき市買物支援事業の委託を受けている平スカイストアで支援事業の現状について見学後、地域包括支援センターが運営している小名浜地区公民館高齢者サロンで高齢者を対象に足湯を提供した。

7日目、第1回と同じ行程で移動した。

(3) 活動報告会

- ① 九州看護福祉大学創立15周年記念式典
日時：2012年5月9日
場所：九州看護福祉大学
- ② 南関町ボランティア連絡協議会総会
日時：2012年5月23日
場所：南関町総合文化福祉センター「うから館」
- ③ 火の国ボランティアフェスティバル
日時：2012年11月9日
場所：九州看護福祉大学

(4) 活動を振り返って

今回の活動は発災後1年の節目と重なり、大震災追悼に伴う事業にも参加した。学生は追悼式典の準備を現地の方々と一緒に行うことで、大地震当日の様子を想像することができた。学生達から「被災者と同じ状況を感じることは難しいけれど、その状況を理解したいという気持ちは、被災された方々の身体的、精神的な癒しにつながるのではないか」、「被災者の心に寄り添うことは難しいがとても大切なこと」などの言葉が聞かれた。

学生達の記録には「1年経っても被災は現在進行形」、「土地や建物が復興していく中、被災者の思いは簡単に元には戻らないということを痛感した」、「現地にはテレビ等で報道されていない情報が多くあった。被災地に来たことで、中学校のグラウンドに積み上げられた瓦礫の山、家の土台だけ残る被災地、真新しい墓石の数など被災地の現状を五感で感じることができた」などが記載されていた。足湯やタッチングケアの技術よりも、コミュニケーション技術が上達し、傾聴する姿勢が身についていった。

3) 第3回活動 (2012年8月5日8~月10日)

(1) 参加者の内訳

第3回は10名の応募者で面接の結果、全員が参加

者になった(表7)。

表7 第3回参加者の内訳

	学 科	学 年	人
学 生	看護学科	1年	1
		4年	1
	社会福祉学科	3年	5
教 員	鍼灸スポーツ学科	2年	3
	社会福祉学科※		1
	看護学科		1

※は男性参加者

(2) 活動スケジュールおよび活動内容

参加学生募集の前にワーキンググループは、7日間の日程であった第1~2回の活動を振り返り、参加者の体力や活動内容を検討し6日間に短縮した。出発前のオリエンテーションでは、災害についての学習やこれまでの参加者からの情報交換を目的とした交流会を行った。

第3回の活動の特徴は、①ボランティアセンター長の講話、②震災の現状を知るために被災地の現地視察、③放射線測定器の持参の有無についての会議実施に加え、④放射能市民測定室「たらちね」の訪問、⑤以前訪問した集落を再訪問、⑥仮設住宅、小名浜地区交流サロンでの薬草茶、薬草足湯の提供などであった。

表8 日程別活動内容 (2012年)

日程	日付	内 容
1	8月5日	熊本空港集合 移動(熊本→いわき市) 泊) 湯ノ岳山荘
2	8月6日	オリエンテーション 平スカイストアのイベント会場設営 泊)
3	8月7日	被災地の現地視察 小名浜地区交流サロンにて足湯 泊)
4	8月8日	遠野町集会所で薬草足湯の提供 泊)
5	8月9日	橘葉町仮設住宅集会所にて薬草足湯 泊)
6	8月10日	移動(いわき市→熊本) 熊本空港にて解散

1日目、移動日。移動中に今後の集団生活にむけて食事のメニューを考える学生もいた。

2日目、ボランティアセンター長から被災後の活動やいわき市の現状についての講話を聞いた。原発事故後に市民が食品の放射線を自由に測定できるよう設立したNPO法人いわき放射能市民測定室「たらちね」を見学し、室長からその施設の設立目

的・利用状況などの講義、全身放射能測定機（ホールボディカウンター）にて学生自身の放射能測定体験を行った。午後、いわき市平七夕祭会場、平スカイストアで開催されるイベントの会場設営等を担当者と共に行った。



図8 会場設営の様子

3日目、ボランティアセンター長から「震災の状況、ボランティアセンターの対応、いわき市の現状」について講話を聞き、センター長の案内により1年半過ぎた被災地の現状を知るために現地視察を行った。また、いわき市民、被災者、仮設住宅に住む避難者などの交流の場としてつくられた「小名浜地区交流サロン」で、そこを訪れた方々に薬草足湯、薬草カフェを提供した。



図9 現地視察の様子

4日目、第2回と同じ遠野町為朝集落にて薬草足湯を提供した。熊本で準備した薬草を煎じ、煎じたお湯を使った足湯とタッチングケアは、高齢者に好評だった。また、自己の健康状況を知ってもらうために血圧測定、薬草足湯などを提供した後は、参加者

とともに交流会を行った。



図10 血圧測定の様子

5日目、楢葉町仮設住宅集会所にて薬草足湯、タッチングケアの提供を行った。より多くの方に集会場に来てもらえるよう2人1組で仮設住宅を訪ね、多くの住民の方が会場に来てもらえるよう案内した。住民の中には会場から仮設住宅へ帰る途中、学生に避難中の自分の思いを30分以上にわたり立ち話をする高齢者もあり、学生はその方の話を聞きながらじっと聴いていた。

6日目、移動日。

(3) 活動報告会

① 優愛祭（九州看護福祉大学祭）

日時：2012年10月22日 10：30

場所：九州看護福祉大学 食堂

(4) 活動を振り返って

今回の活動では、NPO法人いわき放射能市民測定室「たらちね」の見学という好機会に恵まれた。

「たらちね」は、原子力発電所の事故による広範な放射能被害の下で、不安な生活を強いられている市民が、よりよく、より強く、生きていくために必要な施設として設置された。ここには食品放射能汚染測定機、ホールボディカウンターなどがあり、市民は自由にそれらの機械を使用することができた。参加者もホールボディカウンターで測定してもらうことができ、改めて原子力発電所の事故による放射能の影響を深く考える機会となった。測定の結果は「たらちね」の室長から伝えられ、学生達の放射能量は全員基準値以下であり、健康被害は見られない

ことが説明された。

発災から1災年半が過ぎ、建物の再建が進んでいるところもあったが、震災当時のままの地形や瓦礫の山なども残されており、学生達から「復興には時間がかかりそうだね」という言葉が聞かれた。

日々の活動では、薬草足湯と薬草茶の提供を基本に場所を変えて実施した。それぞれの場所では出会った方々の震災への思いは様々で複雑であった。いわき市はいわき市の住民と原子力発電所の事故の影響で避難してきた住民が混在していた。小名浜地区交流サロンではいわき市民が発災時のつらい経験や復興にむけての複雑な思い、遠野町集会場が朝集落では地震の影響で生活用水が枯渇したにも関わらず行政からの支援が提供されない悔しい思い、楢葉町仮設住宅集会所では長引く避難生活へのやりきれない思いなど現地の様々な声を聴くことができた。そのような状況の中でも被災地の方々は、学生達の訪問を暖かく笑顔で迎え入れてくれていた。

4) 第4回活動 (2013年3月9日～3月14日)

(1) 参加者の内訳

第4回は18名の応募者で面接の結果、表9のようになった。

表9 第4回参加者の内訳

学 科	学 年	人
学 生	看護学科	1年 1
		3年 4
	社会福祉学科	1年 2
		2年 1
教 員	鍼灸士 [○] 学科	2年 2
	鍼灸士 [○] 学科※	1
	看護学科	1

※は男性参加者

(2) 活動スケジュールおよび活動内容

第4回の活動の特徴は、①ボランティアセンター長の講話、②放射線測定器の持参、③仮設住宅、小名浜地区交流サロンでの薬草足湯、薬草茶の提供に加え、③立ち入り制限区域だった楢葉町の現地視察、④以前訪問した集落を再々訪問、⑤東日本大震災追悼事業への参加、⑥活動用ベストと帽子を作製し活動時に着用したことなどであった。



図11 活動用ベストと帽子を着用した参加者

表10 日程別活動内容 (2013年)

日程	日付	内 容
1	3月9日	熊本空港に集合 移動 (熊本→いわき市) 泊) 湯ノ岳山荘
2	3月10日	東日本大震災追悼事業イベント補助活動 いわき市主催追悼事業参加 泊)
3	3月11日	オリエンテーション 小名浜地区交流サロンで薬草足湯 泊)
4	3月12日	遠野町集会場で薬草足湯の提供 泊)
5	3月13日	楢葉町いやしの森見学 現地視察 泊)
6	3月14日	移動 (いわき市→熊本) 熊本空港にて解散

1日目、移動日。

2日目、いわき市平薄磯海岸で行われた東日本大震災追悼事業「千の風になつて」(薄磯海岸で住民が復興への願いをこめた風を作成し、犠牲者の追悼と復興を祈って風をあげるイベント)の会場で、追悼事業参加者の受付補助、駐車場誘導、救護等の活動を行った。その後、いわき市主催追悼事業「3.11 いわき追悼の祈りと復興の誓い2013」に参列し、犠牲者の冥福を祈った。

3日目、ボランティアセンター長のオリエンテーションに続き、小名浜地区交流サロンにてサロン利用者に血圧測定と薬草茶の提供を行った。夜は、豊間海岸で行われた追悼行事「とよまキャンドルナイト」(豊間海岸の堤防にキャンドルを並べて点火し犠牲者を追悼するイベント)に参加した。



図12 小名浜地区交流サロンにて

4日目、今回で3回目の訪問となる遠野町集會場で薬草足湯の提供を行った。これまで会場だけの活動であったが、会場近くで神経難病の疾患をもち寝たきりに近い状態で過ごしている方の自宅も訪問した。

5日目、福島第1原子力発電所より半径20Km圏内にある楢葉町で、事故後もそこに残り残された動物達を引き取り、世話をしている住民宅を訪ねた。その後、2月28日まで原子力発電所の事故により立ち入りが制限されていた楢葉町の現地視察に行き、発災当時の様子を見学した。

6日目、移動日。



図13 楢葉町の沿岸部の状況

(3) 活動報告会

- ① 九州看護福祉大学後援会総会
日時：2013年6月15日
場所：九州看護福祉大学 314教室
- ② 学科別学年別自主発表（看護学科1・4年対象）
日時：2013年6月19日
場所：九州看護福祉大学 食堂
- ③ 学科別学年別自主発表（社会福祉学科4年対象）
日時：2013年6月20日
場所：九州看護福祉大学 413教室

- ④ 学科別学年別自主発表（社会福祉学科1年対象）
日時：2013年6月24日
場所：九州看護福祉大学 413教室
- ⑤ 学科別学年別自主発表（看護学科1・2年対象）
日時：2013年6月26日
場所：九州看護福祉大学 食堂
- ⑥ 学科別学年別自主発表（社会福祉学科3年対象）
日時：2013年7月1日
場所：九州看護福祉大学 413教室

(4) 活動を振り返って

今回、ボランティア活動の実施時には、活動用ベストと帽子を着用した。それにより、追悼記念事業に関するボランティアで他団体と合同で実施した活動では、本大学関係者がお互いにどこで何をしているか把握することができた。また、熊本にも震災復興を願って活動している団体がいることを、現地の方々へ視覚的に伝えることができた。

活動前半は学生自身で判断し行動することが少なかったため、後半は学生主体で行動できるよう教員は学生の見守りに撤した。その結果、学生同士が話し合い予測した行動ができるようになった。報告会は、学生の「福島の現状をより多くの人に伝えたい」という思いから学科別に講義終了後の時間を利用して発表した。更に、活動日誌をまとめた報告書を作成し関係者に配布した。

今回は、原子力発電所の事故により立ち入り規制が解除されていたばかりの楢葉町へ現地視察に行く機会に恵まれた。学生達は楢葉町の沿岸部に残された津波発生当時の風景を見て、「津波が来た時のままの風景なんだね」、「いつになったらここに住民が住めるようになるんだろうか」と原子力発電所の事故の影響の深刻さを語っていた。

5) 第5回活動（2013年8月5日～8月10日）

(1) 参加者の内訳

第5回は17名の応募者で面接の結果、表11のようになった。これまで引率教員は大学によって決められた職員が参加していたが、多くの教員がボランティアにかかわれるよう教員1名も公募することになった。

表11 第5回参加者の内訳

学 科	学 年	人	
学 生	1年	1	
	看護学科	2年	2
		4年	2
	社会福祉学科	2年※	2
	鍼灸スポーツ学科	4年	2
教 員	口腔保健学科	3年	2
	鍼灸スポーツ学科	※	1
	鍼灸スポーツ学科		1

※は男性参加者

(2) 活動スケジュールおよび活動内容

第5回の活動の特徴は、①ボランティアセンター長の講話、②放射線測定器の持参、③活動用ベストと帽子的着用、④仮設住宅、小名浜地区交流サロン等での薬草茶、薬草足湯の提供、⑤檜葉町の現地視察、に加え、⑥これまで教員が行っていた出発前のボランティアセンターとのスケジュール調整などを参加学生に委譲したことであった。それは引率教員がボランティアのみならず、どのような場面でも学生に自信をもって活動できる力を身に付けて貰いたいと考えたからである。

表12 日程別活動内容 (2013年)

日程	日付	内 容
1	8月6日	熊本空港に集合 移動(熊本→いわき市)泊 湯ノ岳山荘
2	8月7日	オリエンテーション 小名浜地区交流サロンにてケア提供 泊)
3	8月8日	平七夕祭り2013会場にて 薬草足湯、タッチングケア 提供 泊)
4	8月9日	檜葉町いやしの森見学 現地視察 泊)
5	8月10日	遠野町集落で薬草足湯の提供 泊)
6	8月11日	移動(いわき市→熊本) 熊本空港にて解散

1日目、移動日。

2日目、ボランティアセンター長によるいわき市の震災復興の現状の講話後、小名浜地区交流サロンにて利用者に血圧測定、タッチングケア、薬草茶の提供を行った。



図14 サロンでの様子

3日目、いわき市平七夕祭り会場にあるスカイストアで、薬草足湯・タッチングケアの提供を行った。祭りに参加していた子どもから高齢者まで多くの市民の方々がそこに足を運んでくれた。

4日目、前回同様、檜葉町に取り残された動物を引き取って世話をしている住民宅を訪ねた。前回600頭以上いた動物たちは200~300頭に減っていた。また立ち入りが制限されていた檜葉町の現地視察では2年半経っても発災当時のままの様子を視察した。

5日目、今回で4回目となる遠野町為朝集落集落で薬草足湯の提供を行った。学生たちの訪問は来訪者が少ない集落に住む高齢者にとって、楽しみの時間になっており会話を楽しむ高齢者の姿がみられた。



図15 為朝集落での様子

6日目、移動日。

(3) 活動報告会

- ① 学科別学年別自主発表(看護学科対象)

日時：2013年9月19日

場所：九州看護福祉大学 314教室

- ② 優愛祭 (九州看護福祉大学祭)

日時：2013年10月27日

場所：九州看護福祉大学 イベント会場

(4) 活動を振り返って

今回から活動に関する内容、打ち合わせ、事前準備などすべての事を学生が中心となって運営するようにした。教員は学生の相談役に徹し不測の事態に対応できるよう支援した。

現地では、レンタカーの運転、ミーティングの運営、活動に関する一切を学生にまかせ、教員はひたすら見守った。学生達は、いわき市の方々の声に耳

を傾け、現地視察を通じて、「マスコミで見聞きする様子とは全く違った」、「ここに来なければ一生わからなかった」といった思いをもった。毎日が悩みと気づきの連続で、活動に参加することで自分自身の考え方、価値観が変わったという学生もいた。

学生達が計画したボランティアであるが、次にどのような行動をとれば良いか迷っている場面に遭遇すると、教員はすぐ指示しそうになったがしばらく様子を見てみると、学生同士で解決方法を見つけ行動に移していた。

6) 第6回活動 (2014年3月8日～13日)

(1) 参加者の内訳

第6回は22人の応募者で面接の結果、参加者は表13のようになった。引率教員も2名を公募した。

表13 第6回参加者の内訳

	学 科	学 年	人
学 生	看護学科	2年	1
		4年	1
	社会福祉学科	1年	2
		2年	3
	鍼灸スポーツ学科	3年	1
口腔保健学科	3年	2	
教 員	看護学科		1
	口腔保健学科		1

(2) 活動スケジュールおよび活動内容

第6回の活動の特徴は、①学生主体による活動計画、スケジュール調整、②放射線測定器の持参、③活動用ベストと帽子的着用、④榑葉町・広野町・富岡町の現地視察、⑤東日本大震災追悼事業への参加⑥子ども達への支援を中心とした行動計画の作成などであった。

表14 日程別活動内容 (2014年)

日程	日付	内 容	
1	3月8日	熊本空港に集合 移動 (熊本→いわき市)	泊) 湯ノ岳山荘
2	3月9日	オリエンテーション なこそ希望アートフェス 2014	泊)
3	3月10日	コットンベイク作成作業 現地視察	泊)
4	3月11日	榑葉町仮設住民との薬草足湯交流 平交流サロンにて交流、	泊)
5	3月12日	なこそ授産所との交流	泊)
6	3月13日	移動 (いわき市→熊本) 熊本空港にて解散	

1日目、移動日。

2日目、NPO法人勿来まちづくりサポートセンター主催の「なこそ希望アートフェス 2014」に参加した。参加者と一緒に、なこそ海岸清掃で集められた流木に毛糸を巻いたアートの制作を行った。夜はいわき市東日本大震災追悼事業キャンドルナイトに参加した。

3日目、ボランティアセンターにてザ・ピープルが製作支援を行っている「コットンベイク (綿の実を使った人形)」を作るために集められた綿から、ゴミを取り除く作業を行った。その後、原発事故による警戒区域から外れた富岡町へ現地の状況を把握するために視察に行った。

4日目、榑葉町の林城八反田応急仮設住宅を訪問し、コットンベイク作り、薬草足湯の提供を行った。その後はコミュニティスペースいわき平交流サロンを訪問しサロン利用者と交流をした。震災発生時刻には利用者と一緒に黙祷をささげた。

5日目、就労支援施設B型なこそ授産所の利用者と一緒に歌や踊りで交流を行った。

6日目、移動日。

(3) 活動報告会

① 九州看護福祉大学後援会総会

日時：2014年6月14日

場所：九州看護福祉大学 314教室

(4) 活動を振り返って

ボランティアメンバー決定後オリエンテーションが一度行われた後は、学生が中心となりボランティアセンターとの連絡調整、内容、事前学習など進めた。学生達は事前の意見交換の中から、参加メンバー自身が先の見通しをつけて行動できるよう「ボランティアのしおり」を作った。それには日程だけでなく、持参品、事前学習内容などが含まれていた。

事前学習、現地での活動回数を重ねるごとに、学生たちはそれぞれの役割を自覚し素晴らしいチームワークをみせてくれた。教員は学生が計画したプログラムを遂行できるよう側面的支援に務め、学生と共に活動に参加した。

V. 活動資金・補助金

平成23年度の活動開始当初、大学予算には東日本大震災復興支援ボランティア活動費は組み込まれていなかった。本来ボランティア活動は参加者の自発的な意思と責任のもと参加することが基本であり、それに必要な費用も自己負担するものである。しかし、遠隔地の被災地での活動に参加する意義の重要性を考慮し、参加する学生の経済的負担を軽減するために、学内教員に募金を呼びかけた。また、学生が大学ボランティア活動費の補助が受けられるように検討された。

平成24年度からは、学生のボランティア活動が継続できるよう大学予算に組み込まれた。また、大学後援会も「学生のボランティア活動を支援したい」との意向があり、経済的支援を受けることができた。また、各種補助金を申請し活動資金を獲得することができた。

1. 東日本大震災復興支援ボランティア活動費
事業主：九州看護福祉大学
第1回：270,000円
第2回：300,000円
第3回～6回：各500,000円
2. 九州看護福祉大学後援会補助金
事業主：九州看護福祉大学後援会
第3回～第6回：各250,000円
3. 赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」助成事業
事業主：社会福祉法人中央共同募金会
助成期間：平成24年度
助成金額：280,000円
4. 平成24年度東日本大震災復興支援事業
事業主：公益社団法人日本看護協会
助成期間：平成24～25年度
助成金額：500,000円

【まとめ・考察】

本ボランティアには3年間で、学生延べ59人、教員延べ12人、合計延べ71人が参加した。現地での主

な活動内容は、小名浜地区交流サロン、高齢者サロンなどで被災者との交流、タッチングケア、薬草湯足湯などであった。当初手探りの状態から始まったボランティアは、徐々に組織的に運営されるようになった。

当初は、教員がいわき市のボランティア団体との連絡調整、参加者募集案内掲示、学生の選定、オリエンテーション、同行、共同生活、反省会・報告会の運営など行っていた。しかし、回を重ねる毎に増えるボランティアに関する蓄積された情報が学生間で共有されていった。教員が主となって活動計画の作成やボランティアセンターとの連絡調整を行った場合、学生達の活動に臨む姿勢は受動的なところもみられた。

教員は、ボランティアのみならずどのような場面でも、学生が自信をもって活動できる力を身につけて貰いたいと考え、第5回からは「NPO法人ザ・ピープル」との連絡調整、活動内容、オリエンテーション、反省会、報告会などの運営を学生に任せることにした。その結果、学生達が現地での挨拶、行動計画の修正、担当者との打ち合わせなど学生間で連絡調整を行い、教員は困ったときの相談役として側面的支援に努めることになった。

活動終了後の学生たちからは毎回「現地に行かなければわからないことがある」「現地でしか感じることはできないことがある」という声がきかれた。

現地の生活拠点となった「湯の岳山荘」での自炊生活は、学生たちのチームワークづくりに貢献したと考える。学生たちは限られた時間を有効に使うため、食料の買い出し班、料理班、お風呂班などにわかれ作業を分担していた。チームによっては食事の準備から後片付けまで分担したり、あえて一緒にしたりするところもみられた。なによりも同じ時間、同じ空間を共有することでうまれる連帯感を養い、チームワークの礎をつくる場になったと考える。

加えて、学生と教員が寝食を共にすることにより、連帯感と同じ目的をもって参加した意思を共有することもできたと考える。

夕食後のミーティングは、1日の振り返りの場でさまざまなディスカッションが行われた。1日の活動を通して学生自身が感じたことをお互いに言葉に出し、そこで出た反省を次の行動に活かしていった。

このミーティングは、ボランティアとは何なのか、自分ができることは何なのかと考える機会となり、毎日夜遅くまで自己を振り返った。このミーティングは学生自身の不安な気持ちを仲間と共有できる大事な時間となった。また、自分自身のもやもやとした気持ちや行き場のない思いを仲間に話すことによって、気持ちを整理すると同時に、仲間の話を聞くことで自分自身が気づかなかった思いや感情を知る機会になったと考える。さらに、「現地の人の言葉に元気をもらった」といわき市の方を支えているつもりが、実は私たちが支えられていることを自覚することに繋がった。

現地視察では、復興が少しずつ進んでいるいわき市の様子や福島第一原子力発電所から半径20Kmにあり警戒区域であったため住民の立ち入り規制があった楢葉町、広野町など震災当時のままの風景を見た。そのことは学生達の被災地の見方を変え「マスコミで見聞きする様子とは全く違った」「ここに来なければ一生わからなかった」「行く前までは他人事のようになっていたが、様々な問題があることを知った」など、可視化したものだけでなく、可視化できないものを見つめる目を養っていった。

第2回以降のボランティアでは毎回、放射線測定器を持参し、熊本、東京、いわき、湯の岳山荘、現地視察、足湯の提供施設等で線量を測定した。そこでの線量は熊本県と福島県いわき市の放射線の値はほとんど変わりなく、測定したすべての場所において、1マイクロシーベルトを超える地域はなかった。参加した学生は、災害やボランティアへの意識が高まり「被災していない熊本から来た学生の自分たちだからこそできる支援」とは何かを考えるようになった。被災者は被災地にいる住民同士では話せないことや思いを、知らない誰かである学生に話したり、話を聴いてもらうことで、心が軽くなったり、自分自身で問題を解決できたりすることがある。被災者が自分の思いを言葉として口にだすことで、徐々に心の整理ができてくる。その過程において、専門家ではなく支持する態度を示さず傾聴に徹した若い学生達の存在があると学生たちは気づいていった。

また、被災地でのボランティアだけでなく、大学所在地の玉名市で開催された防災訓練に参加したり、

各種防災関係のイベントを開催したりするなど活動範囲を広げている。

2011年8月に始まった本大学のボランティアは、第6回をもって一区切りを迎えた。しかし、「これまでのボランティアを組織として継続させたい」という声があがった。ワーキンググループは、学生が自主的に災害復興支援ボランティアできるよう、「九州看護福祉大学災害ボランティア活動支援事業実施要領」をつくるよう働きかけ、大学の理解のもと、2014年4月からこれを運用できるようになった。これは、災害支援ボランティアに参加する学生に対し、経済的に支援するものである。この大学独自の支援事業を活用し、今後多くの学生が支援活動に参加することを期待したい。

【謝辞】

本大学の東日本大震災復興支援ボランティア活動の遂行にあたり、れんげ国際ボランティア、NPO法人ザ・ピープル、いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンター、湯ノ岳山荘、いわき明星大学、平スカイストア、福島県いわき市の皆様方にこころよりお礼申し上げます。

また、このボランティアを経済的にご支援して下さいました九州看護福祉大学後援会、社会福祉法人中央共同募金会、日本看護協会に深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) いわき市HP, 過去の東日本大震災の被害状況, いわき市災害対策本部週報,
http://www.city.iwaki.fukushima.jp/info/dbps_data/_material_/info/zhigai20140402.pdf (2014. 5. 25入手)
- 2) 特定非営利活動法人ザ・ピープルHP,
<http://www.iwaki-j.com/people/index.htm>.
(2014. 5. 25 入手)
- 3) 茶屋道拓哉, 筒井睦. 東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義. 九州看護福祉大学紀要. 2012; Vol. 12(1):25-37.
- 4) 小林功英学生ボランティア研究会, 大学教育における震災ボランティア支援のあり方およびその教育効果に関する調査研究,
<https://docs.google.com/viewer?a=v&pid=sites&srcid=>

ZGVmYXVsdGRvbWFpbnxnZnNvdmFzfGd40jIzMWMxYzI5NjY1NTZ
hY2Y, (2013. 7. 11入手)

5) 飯考行, 李永俊, 作道信介, 山口恵子, 平野潔, 日比野愛子. 大学教育としての災害ボランティア - 「東日本大震災復興論」の開講-. 弘前大学紀要. 21世紀教育フォーラム, 7, 2012, p.11-27.

http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10129/4788/1/21SeikiForum_7_11.pdf (2014. 3. 29入手)

6) 倉地睦美. アクション・リサーチにおける教師の「学び」三者間ジャーナルの試み. 広島大学日本語教育学科紀要. 1998 ; VOL 8 :33-40.

http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/ZZT00003/AN10364361_8_33.pdf.
(2013. 8. 1入手)

7) 三瓶まり, 北川かほる, 福井典子, 南前恵子, 前田隆子, 笠置綱清. ボランティア体験が学生にもたらす教育効果 (I). 鳥医短大紀要. 2000. VOL32 ; 24~34.

8) 北川かほる, 三瓶まり, 福井典子, 南前恵子, 前田隆子, 笠置綱清. ボランティア体験が学生にもたらす教育効果 (II). 鳥医短大紀要. 2000. VOL32 ; 35~40.

9) 桜井政成. 地域活性化ボランティア教育の深化と発展-サービス・ラーニングの全学的展開を目指して-. 立命館高等教育研究. VOL 7. 21~40.

http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/kyomu/cer/kanko/kiyo7/07_2_sakurai.pdf (2014. 1. 21入手)